

社会を俯瞰する記述的調査計量に立ち戻る

——データがとらえた日本社会をどう伝えるか——

大阪大学

吉川 徹

1 背景

計量社会学の近年の進展は著しい。調査データの蓄積と、それを提供するデータアーカイブの拡充により、時系列データ、パネルデータ、国際比較データなど複合的な構造をもつ社会調査データの二次利用、あるいはビッグデータ解析の取り組みがさかんになった。その解析技法も、コンピュータの処理速度の向上と相俟って、多次元の複雑な効果の交絡(対数乗法モデル、ミクロマクロの交互作用、ランダム効果など)、潜在構造の推定、因果推論、傾向スコアマッチングなどを駆使することが主流となりつつある。経済学や心理学などの隣接諸分野と歩調を合わせ、これらの新しい解析技法を活用していくことはいうまでもなく重要で、これはまったく正当なトレンドである。

他方で報告者は、日本国内の調査データ収集にこの数年携わっており、2015年にはSSP2015、SSM2015という全国調査の実施を経験した。データ収集にかんしては、戦後日本の社会学には、社会調査法を駆使して精度の高い個票データを得るという「伝統」が培われてきた。大きな費用と労力をかけ、層化多段抽出による個別訪問面接法により得られたデータは、他の方法では得がたい現代日本の俯瞰図を描き出してくれる。こうしたデータ収集実践に重きをおく傾向は、隣接諸分野にはみられない特性だといえる。

最新技法を駆使した(二次)データ解析と、社会調査の良質の(一次)データ収集は、どちらも正確な事実に向けることを目指しているが、方向の異なる動きである。前者は、既存データに対して、歪みや偏りの補正や誤差のコントロールをほどこし、潜在する構造(モデル)の推定を行う。後者は調査設計や実査方法を研ぎ澄ますことで、歪みや偏りや非標本誤差自体を極力小さくして、データそのものが母集団の精密なひな形(モデル)となるように努める。

前者の手法が完全に信頼できるのなら、後者の労力はもはや必要ない。逆に、後者の努力がデータの質として結実している場合は、前者の事後的な補正や推定を頼りにする必要はない。やや極論すれば、そういうことになるはずだ。両者は、「真の社会の姿を追求する」ということについての「哲学」を異にしている。

2 人の顔がみえる水準での記述的調査計量

本報告では、調査主体によるファーストハンドの記述的調査計量が、現代社会学にどのように貢献しうるのかを考えたい。視野を広くとればこれは、いわゆる量的調査の科研報告書の意義を問うということでもある。

『日本の分断 切り離される非大卒若者たち』(吉川徹 2018)は、一般向けの新書として書かれてはいるが、報告者なりの研究理念に基づいた書籍である。この事例をもとに、データがとらえた日本社会の姿の伝え方を考えてみる。同書では性別(男/女)、生年世代(1974生年以上/1975生年以下)、学歴(大卒/非大卒)によってデータに分割線を入れ、切り分けられたセグメントの特性から、俯瞰的に日

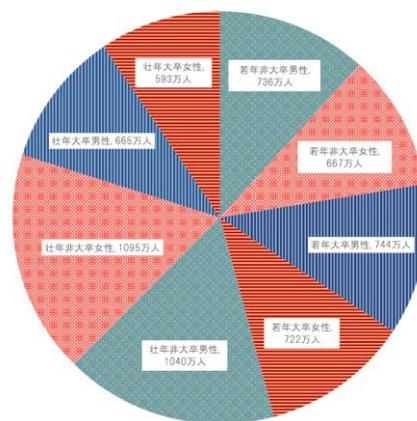


図1 8つのセグメントの構成比率

本社会の現役世代の姿をみている。2015年の日本社会のデータでは、性別と生年世代と学歴は、いずれもほぼフィフティ・フィフティの比率になる。しかも3概念はほとんど一次独立であるため、セグメントがほぼ8等分に切り分けられる(図1)。そこでこのメッシュを独立変数として固定し、社会経済的地位、生活状態、社会的活動、社会意識のあり方をみていくと、現代日本社会を支える「8人」の実像がみえてくる……というのが、同書の枠組みである(図2はその一例)。

要するにこれは、基本属性についての2×2×2という最小の3重クロス表のセルに入る人びとを社会集団だとみなして、そのプロフィールをみているわけで、調査計量としては最も簡便な水準のものである。性別、年齢、最終学歴は、職業や家族や社会関係が流動化・液状化した21世紀の社会においてもなお、終生変わりにくいアイデンティティの源泉なので、現代日本のデータをみる場合、これらのアイデンティティに基づいた比較分析により、人の顔がみえる水準での記述的調査計量を展開することができる。

他方、世論研究や政府統計は、これよりもさらに記述性が高い調査結果の提示に重点をおいているように思う。同書で展開した分析水準は、そこから少し踏み込んだものであり、いわゆるゼロ次の関係だけではなく推定周辺平均などもみている。だが、せいぜいその程度で、潜在構造を探求する多変量解析を突き詰めてはいない。

報告者の知見の提示の理念は、調査主体の側にいる者として、自前のデータの一次分析によって最新の日本社会の俯瞰図を広く提供し、現代日本社会論の「叩き台」となる命題、例えば「若年非大卒男性の社会とのかかわりが消極的である」を提供することである。そういう情報提供のあり方としては、「だれがどれくらい〇〇なのか？」という、それぞれの人の顔がみえる水準にとどまることにも有用性を見出せる。シンポジウムでは、この水準の分析と多変量解析の違いを、アイデンティティ、概念、関係性というキーワードを用いて、もう少し詳しく整理して説明したい。

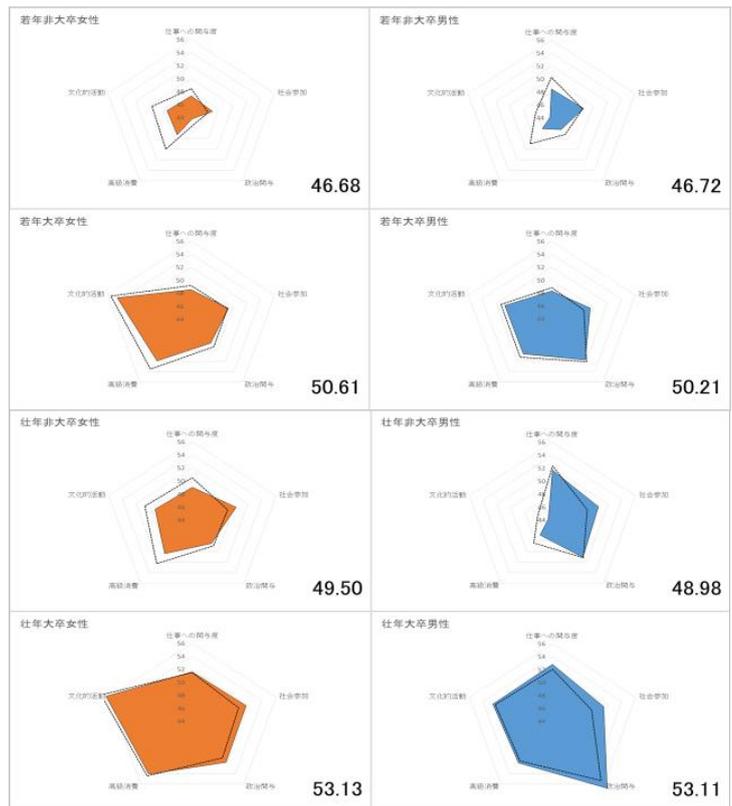


図2 社会的活動の積極性のセグメント間の異なり

3 結論

本報告では、最新の横断的調査データが明らかにする社会の姿の提示法を考えたい。当然ながら、投稿論文においてこの水準の議論がなされることは適切ではないだろう。ただし、最新の大規模社会調査の成果を発信するという場合は、それぞれの人の生活構造が見える「解像度」で、当該社会の実情をシンプルに示す調査計量に立ち戻る／立ち止まることも有用ではないだろうか。そこから、当該社会についての基礎命題を引き出し、それが礎石となって質的研究や高度な統計解析による命題の検証と議論の精緻化を進められる……大規模社会調査に対する社会学界からの期待は、この点にあると報告者は考える。

文献

吉川徹, 2018, 『日本の分断 切り離される非大卒若者たち』光文社.